

桑名家文書「御用留」にみる江戸時代後期の洪水被害

[]内の数字は、桑名家文書の史料番号を示す

寛政3年(1791)	8月5日、夕方から6日夜中まで大雨、大洪水。安永8年(1779)年8月25日の大洪水よりも浸水はさらに三尺(約1メートル)ほど高い。沖前一円、八方窪より原田平一円が水浸しになり、大根・たばこが水腐れとなる[472]。
寛政7年(1795)	6月、大洪水にて滑川村吉池が大破、水が流失する[470]。
寛政8年(1796)	6月4日、大洪水にて、滑川村の大堰が大破する。また、勢至堂村支配下の道に架かる仮橋が流される。8月12日、大高水にて南所定橋が押し流されないよう、庄屋、組頭、村人たちで応急処置をする。勢至堂支配下の道に架かる笠松橋の長柄1本は押し流され、戌石橋が落橋した[470]。
享和3年(1803)	8月15日、朝より大雨、夜に大水となり、滑川村大堰は残らず押し流される[105]。
文化9年(1812)	6月28日、朝より翌7月1日8ツ時(午後2時)頃まで大雨、翌29日に滑川村大堰が大破する[35]。
文政9年(1826)	5月22日、滑川村井堰、洪水にて大破する。8月8日、滑川村新堰南側が洪水にて大破する[143]。
文政10年(1827)	8月20日、大雨にて滑川村大堰、かんな堰の箇所が大破する。9月5日、夜から大雨にて北川筋大水となる[36]。
文政13年(1830)	5月、洪水にて滑川村大堰南側が押し流される[102]。
天保3年(1832)	8月1日夜、大雷雨、川々出水する。9月18日、朝から大雨にて昼頃に大水、近年にない洪水にて田一面が浸水する[9]。
天保5年(1834)	8月13日夜から14日にかけて大雨にて、川々大洪水となる[66]。
天保6年(1835)	4月14日、大雨にて出水し、牛袋橋、中宿橋が落橋する。6月24日、雨にて大出水、滑川村大堰が大破する。閏7月6日夜大雨、翌7日雨降り小嵐寒し、4ツ時(午前10時)頃から大風雨、嵐になり、北川筋が大出水となり、大堰が大破する[10]。
天保7年(1836)	7月12日、大雨にて滑川村大堰・北枝堰から一面大水となる[160]。
天保10年(1839)	8月13日、大雨、翌14日朝まで雨降り、大洪水[104]。
天保14年(1843)	閏9月1日夜から、翌2日昼頃まで雨が止まず、洪水となる[69]。
天保15年(1844)	3月20日昼から夕にかけて大雨にて滑川村大堰土手通り築立の場所が大破する[14]。
嘉永3年(1850)	8月5、6日、出水にて堰が大破する[33]。
安政3年(1856)	8月25日、夜、大雨にて大洪水、銅屋坂の仮橋が落橋する[447]。
安政5年(1858)	6月14日、朝から大雨、7ツ時(午後4時)頃に大洪水となり、水車や土蔵など流失、7ツ半時(午後5時)頃さらに水が押し寄せ、田に砂泥が押し入るほか、田畑とも大損耗。寛政8年の大洪水以来の大きな被害となる[54]。
万延元年(1860)	6月10日、夜大雨にて洪水となり、勢至堂支配下より江花村支配下の橋が大破する[67]。

郷土の歴史資料をまもります ~ぜひ私たちにご相談ください~

私たちの研究部門では、地域に伝わってきた歴史資料を保存する活動をおこなっています。もし、おうちのタンスや押し入れ、あるいは蔵のなかに「古文書らしきもの」があれば、ぜひ私たちにご相談ください。

【連絡・お問い合わせ】

東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門

〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL/FAX 022-795-3140

E-mail uehiro@grp.tohoku.ac.jp

URL https://uehiro-tohoku.net/

2021年7月24日発行

別冊 史の杜

F U M I N O M O R I



東北大学

地域の歴史を知る 古文書からみた 災害と須賀川

No.3

東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門

水とともに生きる百姓・村

私たちの研究部門では、須賀川市立博物館との古文書の共同調査を実施し、村落史研究に取り組んできました。江戸時代の百姓たちは、水害からどのように生活を守り、また水を利用していたのか、紹介いたします。

江戸時代の須賀川市域には56の村があり、村々は河川から用水を引き入れ、あるいは溜池を造成するなどかんがいの灌漑をおこない、農業生産に欠かせない水を確保していました。

市域には釈迦堂川や阿武隈川だけでなく、西側に位置する奥羽山脈から東へと流れる河川があり、豊富な水源を持つ一方で洪水に悩まされました。



享保7年(1722)12月16日「奥州岩瀬郡堀籠村と榊衝村川除論裁許之事」(廣田家文書255)

テーマ展：おもな展示資料

- ・桑名家文書(江戸時代の滑川村庄屋、常陸府中藩(長沼藩)領)
- ・小針家文書(江戸時代の上松塚村名主、旗本・溝口家知行所)
- ・廣田家文書(江戸時代の堀込村名主、旗本・溝口家知行所)

上記の文書群と、須賀川市立博物館所蔵資料や『須賀川市史』『長沼町史』『岩瀬村史』などの歴史書を参考にしています。

本誌は、2021年7月24日(土)から9月5日(日)に開催する須賀川市立博物館のテーマ展「古文書からみた災害と須賀川」(企画・制作:須賀川市立博物館、東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門)をもとに作成しています。

須賀川市域の河川



4

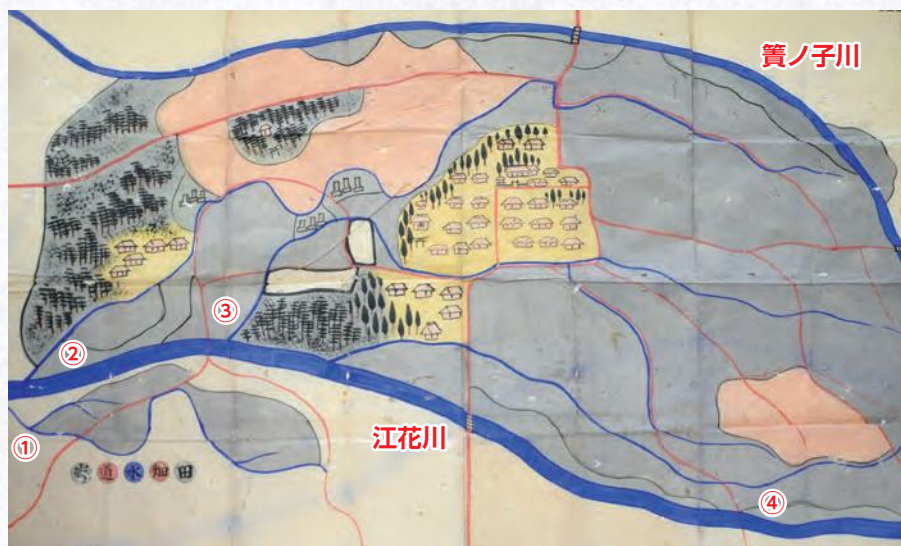
- 白河藩領
- 常陸府中藩領
- 旗本溝口家知行所
- 旗本三枝家知行所
- 越後高田藩飛地
- 土浦藩飛地

明治維新ころの領主支配及び河川

市域を流れるおもな河川として、笹原川・滑川・岩根川・箕ノ子川・江花川が東流しており、これらの川が北流する釈迦堂川・阿武隈川へ注いでいます。

堀込村の農業用水

堀込村では、村の南境を東流する江花川から4か所の取水口を設け田畑へ引水していました。この取水口から水をスムーズに引き入れるためには堰が必要でした。堰によって川の流れをせき止めることで、勢いが弱まった水を取水口から導きました。これには開閉可能な水門(樋)が設置される場合もあり、その開閉によって引水量を調整していたのです。江戸時代後期の堀込村には、江花川の上流(西)から、①馬居河原堰、②中堰、③大堰、④下川原堰がありました。

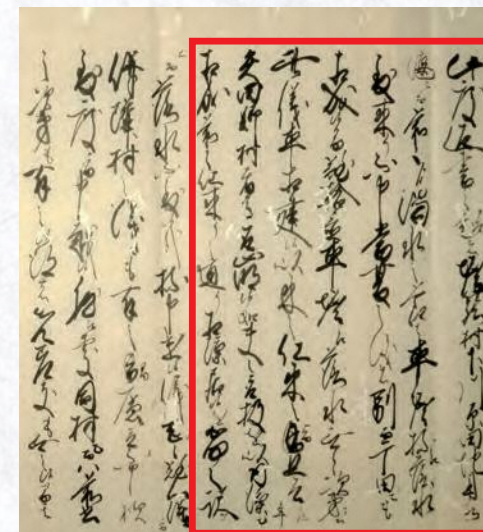


「堀込村絵図」(廣田家文書 257)
堀込村は水田が多いことがよくわかります。堀込村内のうち、写真中央の白い部分(2か所)は榊衝村の田地。一方、江花川より南の灰色のところは堀込村の田地でした。両村の土地所有は入り組んでいました。

水をめぐる争論 ~水車経営をめぐる~

堀込村では、下川原堰のすぐそばに水車を設置していました。これに対し、近隣の矢田野村(白河藩領)では、下川原堰のことを「水車堰」と呼び、嘉永6年(1853)には田方用水に支障があるから水車を撤去するよう命じて欲しいと領主に訴えを起こします。これに対して堀込村は、水不足の際や水田利用時の水利用の取り決めを守って運営している旨を返答し、両村で争論となりました。

江戸時代の百姓や村にとって、水は飲水、農業用水として、また水車の動力源としても重要だったのです。



【翻刻文】(赤枠部分)
此度返書之趣は堀籠村下川原田地用水堰三而前々方渴水之節は車堰杯へ落水致来り不申、当夏之儀は別而干田ニも相成候間、難捨置車堰へ落水無之次第ニ而此儀車相建候以来之仕来之旨、且去ル年矢田野村者共取崩候処、夫々取扱を以内済と相成、前々之仕来り之通り相済居候